

変わらぬ祈りと温かいご関心に感謝

「ここで目にする水路も堰も、豊かな実りも、全て良心的協力の結晶です。ほとんど見捨てられた人々への、変わらぬ祈りと温かいご関心に感謝します。事業は世代から世代へ、氷河の水が絶えるまで続けられます。現地PMS一同もまた、祈りを合わせ、この仕事を自らの励みとし、更に意気軒昂です。良いクリスマスと新年をお迎え下さい。」

— 中村 哲 (ペシャワール会報130号より)

中村先生、PMSとペシャワール会の 一年の報告です

PMS (ピース・ジャパン・メディカルサービス) 総院長／ペシャワール会会長

村上優

中村哲先生が亡くなられて一年が過ぎます。この一年の事業継続への道のりを御霊にご報告いたします。PMSとペシャワール会の再出発をこれからも導かれんことを祈ります。

二〇一九年十二月四日にドライバーのザイヌッラーさん、護衛の四名と共に先生が昇天されたときは、誰しも今後の活動に大きな不安を抱かずにはおれませんでした。けれども、二〇二〇年一月二五日に開催した中村先生のお別れの会には五千名を超える方々が参列され、アフガニスタンと日本だけでなく様々な国の人々より弔意や先生の生涯に対する賛辞をいただきました。そのような皆様からのお励ましと期待に後押しされて、事業継続への使命を強く感じました。

「中村先生の事業は全て継続し、中村先生の希望は全て引き継ぐ」ことが、昨年十二月十二日に、先生の御遺体と共に来日され

たジアPMS副院長と協議して決まりました。今年二月にニューデリーで、PMS主要メンバー八名とペシャワール会PMS支援室六名とで事業継続について具体的に打ち合わせをしました。背後に新型コロナウイルスの感染拡大を感じつつも、中村先生を喪失した悲しみを共有し、中村先生の魂が私たちと共に在ることを信じていることができました。それ以降は先生の魂との対話で事業が展開し進んでいます。

PMS総院長は村上が引き継ぎましたが、PMSの運営はジャ先生を中心に、医療・農業・灌漑・事務部門の責任者十二名で運営委員会を構成して協議することが定着してきました。日本人の村上が総院長となった意義は、困難な時に中村先生の意志を反映して決定・解決できるように、との期待から、日本側が果たすべき役割と中村先生が果たしてきた使命を強く感じました。それは自然の摂理を前に、目先の利害や、依



バルカシコートの既存取水門と上流を望む。二つある水門のうち一つは土砂で埋まっている。(2020年10月15日)

って立つ宗教や信じるもの、文化、思想が異なっていくと、目の前の状況を受け入れることです。いつも順風とはいかないでしょう。難題にぶつかるともあると思います。そんな時には、中村先生の「水が善人・悪人を区別しないように、誰とでも協力し、世界がどうなろうと、他所に逃れようのない人々が人間らしく生きられるよう、ここで力を尽くします」(会報一二六号より)という言葉をかみしめながら、前に進んでまいります。

医療・農業・灌漑の活動報告

医療事業ではダラエヌール診療所の活動が多忙を極めています。域内だけでなく、時には遠くから診療を受けに来る患者がいるほどです。アフガニスタンでは詳細な確定診断は困難ですが、新型コロナウイルス感染症が拡がり、診療した医師も罹患しました。幸い大事には至っていません。

農業事業は、ガンベリ農場で小麦をはじめオレンジなどの果物やサトウキビ、酪農、養蜂なども拡がって定着しています。植樹は約一二〇万本になり、大地を緑にし、荒々しい気候変動を少しでも和らげる役割を果たしています。

灌漑事業は、マルワリードⅡ堰（ダム）の新ペラ延長用水路、流域全体の排水路網が完成しました。また八・九kmの護岸工事も完成し、この事業は植樹を残すのみとなりました。今後は用水路の保全を見守っていきます。

中村先生が地元住民と約束されたゴールクの取水堰と用水路の工事は、対岸にあるシギ堰を含めて幅一kmのクナール河全体を見渡して工事をする必要があります。設計段階でPMSの技師と日本の技術支援チームが相互に詳細に検討をしています。工事が下流域に与える影響や洪水を想定しての調査などが、コロナ禍の規制のなかで進められました。この秋に着工を予定していました。

が、慎重を期して来年秋の着工へと変更しました。一方、先年より構想されていたマルワリード堰上流対岸のバルカシコートの取水堰と用水路の工事が始まるようとしています。

災害にも見舞われました。この八月、シエイワ郡ウォレス谷に激しい鉄砲水・土石流が発生し、住民十六名が亡くなりました。また、マルワリード用水路N地区で一・五kmに亘り深刻な被害を受けました。水路、サイフォンなどが完全に土砂で埋まり、送水不能になりました。PMS職員による集中的な工事で土砂を浚（しゅんせつ）し修復しましたが、これを機にマルワリード用水路全二五kmの浚漑を始めました。冬には用水路床面のライニング（覆工）を始めます。H池やQ池など、計画どおりに土石流を食い止め、流域の安全を守ってきた巨大な池も、多くの土砂が堆積しており、大規模な浚漑を必要としています。恩恵にあずかっている人々が、部族間の対立やこれまでの恩讐（おんしゅう）を超えて協力し、計画的に自分たちで浚漑をする体制の整備が急がれます。

PMS取水方式はこのクナール河流域に定着し、今後もこの方式に沿って修復工事や新しい取水堰・用水路の建設が予定されています。難民となった人々が戻ってきて家族と一緒に生活できる、平和な光景が広がってきています。

『PMS方式灌漑事業ガイドライン』の完成を目指して

中村先生の最後の著書となった『アフガン・緑の大地計画』は、英語、ダリ語、パシュトゥ語に翻訳されて、PMS方式が広くアフガニスタンで知られることになりました。このテキストを基礎に、灌漑事業の哲学を実際の取水堰や用水路の設計・施工・監理に反映させた、より技術的なガイドライン作成が先生の悲願だったのですが、完成を見ずに亡くなられました。

『PMS方式灌漑事業ガイドライン』作成はJICA（国際協力機構）との共同事業です。担当のCTII社（建設技研インターナショナル）技師の今野さん、宮城さん、細野さん、JICA専門技師の永田さん、ア

フガニスタンでの気象水文調査の経験を持つ児島さん、中村先生の山田堰・筑後川に

関する技術的な相談役であったテクノ社の樋口さん、山田堰土地改良区元理事長の徳永さん、福岡在住の建設コンサルタント会社の重鎮技師の大和さん、宮本さんといった錚々たる専門家がPMS支援室と協働して、中村先生の著書、長年の週報として報告された活動記録や話されたことを読み解いています。そうした作業を通してガイドライン完成の光が見えてきました。この専門家の皆様が、中村先生の思想を引き継ぐ技術支援チームです。

今後、この日本語版を英訳し、PMSとアフガニスタン政府の確認を経て完成に至ります。これがダリ語、パシュトゥ語に訳

中村先生と共に働いています

PMS活動報告

PMS（ピース・ジャパン・メデイカルサービス） 副院長／ジャラバード事務所所長

ジアウルラフマン

はじめに

ドクターサーブ中村が亡くなられてしば

らくは、私たちは同僚のザイヌッラーの亡骸を埋葬することに慌ただしい日々を過ごしていました。その後、やっと事業を再開

されて、いよいよ具体的なPMS方式の灌漑事業ガイドラインが世に出ます。先生が夢見た、広く人々の命をつなぐための水道、緑の道が始まります。

さらに、これらの活動を支援してくださる人々の広がりがあります。先生が尊い犠牲になられ、先生が活動されてきたことがあまねく世に知られることになり、支援の輪が広がっています。「アフガニスタンでの二十年の事業継続を」と中村先生が願い、私たちに説かれていたことが少しずつ現実のものになってきました。

私たちはいつまでも先生の魂と言葉を灯台として前に進みます。いつも、どんな時でも、見守っておられることを感じることができる幸せに感謝いたします。

した直後に、今度は世界中が新型コロナウイルスの脅威にさらされ、アフガニスタンも外出自粛となりました。PMSのスタッフもしばらく自粛しておりましたが、州政府の許可をとり、マルワリード用水路F区の修復工事やマルワリードII堰での作業を開始しました。

この度は、ドクターサーブ中村がお亡くなりになってから現在までに我々が実施したことを皆様に報告いたします。ただ一つ申し上げておきたいのですが、私はドクターサーブ中村が逝ってしまったとは感じ